

アドラー心理学による乳児の発達と教育

古 庄 高

Summary

The Development and Education of an Infant based on Adlerian Psychology

FURUSHO Takashi

The purpose of this paper is to explore the development and the education of an infant in our current disintegrating society. Presently both our way of raising children and our school system are in a tight corner. Often parents and teachers feel helpless and try to find a new view of child rearing and new skills as an effective action.

Many parents know that the strict autocratic ways which use power, pressure, competition and a threat of punishment are not useful anymore in a democracy. Children today do not accept the traditional approach. They reject the disciplines, ideas and values of adults. But parents and teachers have not been trained to teach the skills of living in the democratic relationship of equals. We must learn new forms of dealing with each other based on the principles of freedom and responsibility.

Adlerian psychology suggests the fundamental premises on which we should operate and shows the personality structure which enables us to live as free democratic men. The method which it suggests for the solution of problems which our children present at home and at school seems to be indeed effective.

はじめに

本論ではアドラー心理学の観点から、乳児の発達と教育について考察する。アドラー心理学は独自の基本的・心理学的前提に基づいて人間の行動を理解しようとするが、その人間観や実践は、現代の子育てや教育について考察する場合にも、大いに参考にできるように思われるからである。従って本論は、アドラー心理学の理論を教育の分野に発展的に応用することによって、子育てや教育の基本原則や方法を考察し、基礎づける試みである。

現在、子育てや教育は、多くの国で非常に困難な状況に直面している。従来の子育てや教育のやり方ではうまくいかなくなっているのに、それに代わる新しい原理や方法を見出すことが難しい。おそらく子どもたちの成育環境とりわけ文化環境が急激に変化していることに関連するのだろうが、現代の子どもの行動や考え方を理解することは容易ではないし、人間形成のプロセスも新たな様相を見せている。大人から子どもへの文化伝達については、コンピュータや携帯電話の普及によって、身近な生活における文化内容や価値そのものが激しく変容しているので、世代を超えて伝達されるべき文化についての吟味が必要だ。また文化伝達としての子育てや教育の営みは、内容面ばかりでなく、その方法についても問い直しを迫られている。通信機器の進歩によって、コミュニケーションや対人関係のあり方が従来とは根本的に異なるからである。

ヒトとして生まれた新生児が現代の社会的・文化的環境のもとで人間として成長を遂げ、健全なパーソナリティを形成する過程を、教育学の視点から改めて検討したい。情報社会化が進めば進むほど、人間形成の過程に及ぼす無意図的な社会・文化環境の影響は大きくなるが、しかし直接的な対人関係およびそこでの教育的な関係のもつ意義や影響力が少なくなっているわけではないだろう。むしろ直接的な対人関係のあり方やその教育的作用が、この成熟し高度に情報化した市民社会において、従来とは異なる意味や価値をもつようになったのではないかとと思われる。従って、特に子育てや教育に携わる親や教師は、子どもとの関係のあり方に敏感でなければならない。親や教師の教育的意図や行為が実際に子どもの成長や発達に及ぼす作用は、子どもとの関係性に大きく左右されるからである。

1. 乳児の感覚能力と社会的相互交渉

新生児

生まれたての新生児（生後約4週間）は、いかにも頼りない存在だ。首もぐらぐらして安定せず、小さくて今にも壊れそうな印象を受ける。睡眠と覚醒とを繰り返しながら、一日のうち20時間は眠っている。隣の部屋で赤ちゃんがいつまでも静かに寝ていると、ふとく息をしているかな？><生きているかな？>と心配になるほどである。このような印象を受けるのは、主に新生児の運動能力がまだ発達しておらず、無力な状態にあるからである。直立歩行はもちろ

ん、はうことも手でものをつかむこともできず、寝返りをうつことさえできないので、本当に弱々しく見える。では新生児は無能で、なにひとつできない存在なのだろうか。

新生児は一日の大半を眠っているが、はっきりと目が覚めている時間もある。そして眠っているときには、深い規則的な眠りの状態や不規則な眠りの状態などが見られ、また覚醒時には、完全に目覚めて気持ちよく静かにしている〈覚醒無活動状態〉や、手や足を動かしたり、頭や腰をねじったりしている〈覚醒活動状態〉などを区別することができる¹⁾。すなわち、新生児には種々の生理的状態・意識の水準があるわけである。新生児の感覚能力をテストしてみると、〈覚醒活動状態〉にあるときにはテスト結果がおもしろくないけれども、静かに目覚めている〈覚醒無活動状態〉のときには、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚などの感覚がすでにより機能していることがわかっている。たとえば薄暗い部屋では、明かりの方を見たり、ガラガラを目で追いかけたりするし、人の声があるとその方向へ頭を向けようとしたりする。感覚能力については、すでに誕生以前の胎児の状態の時から視覚や聴覚や皮膚感覚が働いていることが明らかにされており、新生児は基本的な感覚能力をもって生まれてくるのである。乳児は「驚嘆に値する行為を達成できる²⁾」とさえ言えるのである。

生後10日目の新生児は、自分の体に近づいてくる対象に対して、目を見開く、頭を後ろに引く、手で顔を防ぐなどの防御的な反応を示す。バウアーのこの実験結果には驚かされるが、新生児には自分に真直ぐ向かってくる物体と、その軌道はずれて進んでくる物体とを弁別する力もあるらしい³⁾。

また「新生児研究のばあいには新生児の興味を捉えることができるかどうかによって結果が左右される⁴⁾」とのことであるが、新生児や乳児が、非社会的な刺激よりも〈社会的な刺激〉に対してより強い興味を示すことは、人間が社会的存在としてこの世に生まれてくることの表れであるように思われる。新生児は簡単な図形を見せるよりも、人間の顔が描かれたパターン図形の方を長時間注視する。さらに新生児には次のような模倣行動が見られる。母親か誰か大人が目の前で繰り返しゆっくりと口を開閉したり舌を出したりすると、新生児はそれをじっと見て模倣する。しかも「新生児は実際にこのような相互的な模倣ゲームをよろこんでやっているように見える⁵⁾」ということであるから、相互的な行為自体が満足をもたらしているのだ。これは〈共鳴動作〉と呼ばれ、生理的な反応と心理・社会的な反応が深く結びついていることを示している。

このような模倣行動に加えてバウアーは、誕生後の数時間以内にあらわれる〈相互同調活動〉を、人間が生得的に社会性をもっていることの証拠のひとつに挙げている⁶⁾。この〈相互同調活動〉と呼ばれる行動は、ふたりが話しているとき、話し手にある決まった体の動きが起こり、それにつれて聞き手の方にも微細に呼吸を合わせた動きが見られる行動である。相互同調活動は、それによって何らかの意味が伝達されるわけではないが、それが欠ければお互いの理解が妨げられてしまうような、相手との一体感あるいは融即感を示す非言語的な活動である。生まれたばかりの新生児が、人間の声に対してだけ相互同調活動を起こすというのも、興味深い事実であろう⁷⁾。

乳児期の相互交渉

乳児期は、誕生から1歳半くらいまでの時期、つまり赤ちゃんが言葉を使うようになるまでの時期をさしている。〈乳児 infant〉の語源は〈語らない者〉である。言葉が出る以前の発達、言語象徴を使うようになるまでの乳児期の発達は、一生のうちでもっとも活発である。なんといっても乳児期の期間中に、泣くことしかできなかった誕生後間もない新生児が、知覚や運動機能の発達によって二足歩行や手の使用が可能になり、言語によるコミュニケーションの準備などができてくるのである。乳児はこの間に外界の多様な刺激に触れながら、身体感覚運動器官を発達させる。近くにあるものに手を伸ばし、つかんで手で振ってみる。それを口にもって行って味わってみる。こうやって目と手の協応動作を身につけていく。目と手の協応だけでなく、多様な文化的・社会的な刺激との相互作用によって、さまざまな身体図式や知能を発達させる。

感覚器官や運動器官の発達が、社会的および文化的な関係や意味のネットワークを背景にして進んでいくということに、注意を払っておこう。たとえば赤ちゃんが口に入れた木製のおもちゃは、外国の工場で作られて輸入されたものかもしれない。また、そのおもちゃは、父親が偶然に立ち寄ったお店で買ってきたもので、それを3歳年上の姉が赤ちゃんに渡したものかもしれない。つまり赤ちゃんを取りまくものはすべて、すでに社会的・文化的な文脈のなかに存在しているのだ。つまり木製のおもちゃは、ひとつの〈感覚刺激〉として抽象化することはできるけれども、実際には〈特定の具体的な事物〉として、ある状況を背景にして存在している。

同じように人間の欲求や行動についても、生理的なものと社会・文化的なものとを厳密に区別することは難しい。例えば赤ちゃんは空腹になると泣いて授乳してもらうが、授乳の行為はけっして生理的な満足だけをもたらすのではない。正高信男の研究によると、赤ちゃんが母乳を飲むときには、吸っては休み、吸っては休みを繰り返す⁸⁾。つまり、一気に母乳を飲むのではなく、必ず休止をとりながら飲むのだが、それは乳首を吸いつづけると息苦しくなるからではない。赤ちゃんののどの構造は、成人とは異なる特殊な形態をもっており、息苦しくならないようになっているらしい。それでも休止をとりながら母乳を飲むのは、授乳には、生存にかかわる〈生理的満足を越えた意味〉があるからである。休止期間になると今度は母親が優しく赤ちゃんを揺さぶる。揺さぶりながら「よしよし」と声をかける母親もいる。赤ちゃんは休止をとり、それを期待しているのだ。このように授乳の際には、赤ちゃんがくちびるで乳首を吸う動作で母親に働きかけ、吸う動作が休止すると今度は母親が揺すって刺激を与える。要するに授乳は母親と赤ちゃんとの社会的相互交渉なのであり、しかも双方の行動パターンはどちらも遺伝的に決められているらしい。授乳がただ単に生存のための栄養摂取の手段なのではないことがよく分かる。

バウアーは新生児の模倣行動や相互同調活動を例にあげつつ、「研究者たちが、実際に新生児自身が自分は人間であることを知っており、他の人間に向けて非常に多くの社会的反応を出していることを示す資料を集め始めたのは、ごく最近になってからにすぎない⁹⁾」と述べているが、授乳の際に見られる相互交渉においても、赤ちゃんは母親に社会的反応を出すことでコ

コミュニケーションがなされ、情緒的な関係が育まれていると言えよう。ふたりのあいだには授乳以外にも、お互いにじっと目を見つめあう、言葉にはならない声をお互いにかけてあう、お互いにほほえみかける、声をかけると手足をバタバタして喜びを表すなど、実にさまざまなかたちのコミュニケーションが行われている。赤ちゃんは、自分からも働きかけつつ、周囲からの刺激を能動的に受容しているわけである。働きかけと応答とが交互に繰り返られる社会的相互交渉を通じて、つまり自分の世話をしてくれて、心や体の欲求を満たしてくれる養育者とのかわりのなかで、乳児は特別な心の綾を刻み、〈心的な存在〉として養育者と〈情緒的なきずな〉を築いていくのだ。

2. 相互交渉による協力的な関係づくり

現代の日本式育児の落とし穴

ところが現代の日本の育児では、この〈赤ちゃんとの母親のコミュニケーション〉の大事さが、きちんと理解されていないのではないだろうか。母親は赤ちゃんの身体的な世話をすることには熱心だが、それを相互交渉だとは思わずに、単に〈生理的欲求を満足させればよい〉と思っているのではないだろうか。品田知美によれば、1980年代半ばに登場した〈超日本式育児〉においては、〈(赤ちゃんが)泣けば飲ます〉〈せがまれば抱っこする〉〈夜は添い寝〉といった〈徹底して子ども中心のペースの育児法〉がとられている。すなわち、〈子どもの欲求には原則として応えるのが基本の育児〉が行われ、子どもは自分で欲求をコントロールするちからを身につけないまま成長する、というのである¹⁰⁾。

そこでは母親の側に、子どもを〈ひとりの人間〉として全体的に理解し、子どもと全人的な関わりをもとうとする姿勢が欠けているように思われる。子どもを単に〈生理的充足を求めもの〉と見なしているのではないか。そして〈この子の(生理的)欲求になんでも応えてやろう〉と献身的に努力するのだが、献身的であればあるほど親は疲れ果ててしまうのだ。欲求になんでも応えようとする赤ちゃんとペースに振り回されることになり、両親の生活が犠牲にされてしまいかねない。

赤ちゃんの欲求に個別に対応するのではなく、ひとつひとつの欲求が出てくる背景、すなわち生活の全体的な流れを見る必要があるだろう。子どもの欲求は〈ひとりの人間としての欲求〉なのだから、つまりその欲求には生理的欲求だけでなく母親との触れ合いを求める〈社会的欲求〉やそれ以外の欲求も含まれているのだから、その全体的な相互交流の視点から、〈赤ちゃんの欲求にどのように応えたらよいのか〉を判断していかなければならない。個々の欲求を生活の流れから切り離して個別に対応しようとする、〈どの程度、我慢させてもよいのか〉〈どの程度、待たせてもよいのか〉など、しつづ的な多くの問題に対してきちんとした対応ができなくなってしまう。子育て経験のない親、とくに若い母親にとっては、マニュアルがほしいところだろう。だが、赤ちゃんをマニュアルの対象にするのは難しい。人間はマニュアルを超えた存在であり、〈生理的〉とか〈社会的〉とかいった分析をする以前の〈全体的存在〉である。もちろん赤ちゃんが長時間ぐずったり、熱を出したりすると心配になるし、病院に連れて行っ

て医者に診てもらわなければならない場合もあるだろう。そんなときには〈全体的存在〉などと言っている余裕はない。だが日常の育児については、それぞれが赤ちゃんとのコミュニケーションを通じて赤ちゃんの状態や欲求を判断し、対応するしかない。

協同の関係を築く

赤ちゃんの欲求に振り回されないためには、母親は赤ちゃんとの〈相互交渉〉に注意を払い、〈協同の関係〉を築くことだ。先に述べたように、赤ちゃんは、母親の働きかけに応答するだけでなく、自分から能動的な働きかけも行っている。〈協同 cooperation〉はアドラー心理学のキーワードである。「協同は誕生とともに始まる¹¹⁾」のであり、母乳を飲んでいるとき、「子どもは最初の協同に乗り出している¹²⁾」と言える。母親は赤ちゃんとの相互交渉のなかで、赤ちゃんが徐々に〈待つこと〉や〈我慢すること〉を身につけるように導くことができるだろう。相互交渉はまさに母親と赤ちゃんの両者が〈協同〉することで成り立っているのであり、協同のあり方に気づくことから、お互いの意思や欲求を尊重するようなかかわり方ができてくるだろう。母親は一方的に自分のペースで世話をしたり、話しかけたりするのではなく、赤ちゃんとのやりとりや相互の協同を楽しむ気持ちが重要である。また反対に、自分のことをすべて犠牲にして、赤ちゃんの欲求に無条件に応える必要もないのだ。赤ちゃんの欲求には緊急度の高い欲求もあれば、それほど緊急ではないものもある。単なる甘えやわがままを通してのような欲求もあるだろう。赤ちゃんとのやりとりに気をつけ、協同の関係を築くことで、それらの違いを見きわめることができる。

言い換えれば、母親には〈自分の子どもと協同する能力〉および〈子どもを母親と協同するようにもっていく能力〉が大事になってくる。母親の側に〈子どもと協同する能力〉があってはじめて、子どもは〈協同〉を学ぶことができるのだ。アドラーは、母親のこの能力が子どものあらゆる潜在的な能力に影響を与える、と考えている。そして母親がこの能力（スキル）をうまく用いることができるのは「母親が赤ちゃんに関心をもち、赤ちゃんの愛情を得て、赤ちゃんの福利を確かなものにするに専心しているときだけ¹³⁾」である。子どもが〈協同する能力〉を最初に発達させるのは、子どもが母親にほぼ完全に依存し、母親が子どもの生活のなかでもっとも重要な役割を果たしているこの乳児期である。赤ちゃんを抱き上げたり、食べさせたり、風呂に入れたり、寝かしつけたりなどするときには、母親はこれらの活動に関心をもち、赤ちゃんとは協同しつつ自分のスキルを上達させることが必要だ。それがうまくいかなければ、赤ちゃんは不快になったり反発したりして、協同を学ぶ機会を逸してしまうだろう。

では、母親は子どもと協同するためのスキル・能力をいつ、どうやって手に入れるのだろうか。アドラーは「あらゆるスキルは関心と訓練の結果である。母親になるための準備は、人生の非常に早い時期に始まる。その最初のステップは、女の子が自分よりも小さい子どもに対して示す態度や、赤ちゃんや自分の将来の仕事に対する関心のうちに見出される¹⁴⁾」と述べて、〈母親自身が協同に向けて訓練されること〉〈母親になるための教育〉の重要性を指摘している。

心を空っぽにする

母親がテレビを見ながらオムツを替えたり、電話をかけながら授乳したりするのは、母親の関心が漫然とした状態であったり、〈目の前のこと〉以外に向けられていることを示しており、協同的な相互交渉に専心していると言うことはできない。そして乳児期の非言語的なコミュニケーションに見られる相互交渉は、やがて幼児期以降の言語的なコミュニケーションへと発展していくが、子どもと協同の関係を築くという意味では、乳児と相互交渉するときの〈赤ちゃんに関心をもち、赤ちゃんとは協同するスキルを訓練する〉母親の姿勢は、その後の言葉による相互交渉においても、引き続き保持されなければならない。母親の一方的な世話と相互交渉とは異なるように、〈一方的に話しかけること〉と〈対話すること〉は、同じではない¹⁵⁾。いくら親密な態度で〈話しかけ〉を行っても、それが親の（正しい）考えを押しつけよう、子どもの欠点や間違いを性急に指摘して、性格や行動を一定の〈型〉にはめ込もうとするものであれば、子どもの主体性や創造性は抑圧され損なわれてしまうだろう。子どもの人生の主人公は、子ども自身であり、自分を生きることが主体的な意欲や関心を促すのだ。

子どもとの対話や相互交渉を育むためには、大人は自分自身の思いや願望や結論はひとまず括弧に入れておいて、心を相手にしっかりと向けること、すなわち相手の感情や意思をできるだけ正確に洞察し受け止めようとする姿勢が求められる。相互に対話し交渉することは、大人自身が心を〈目の前のこと〉に向けることである。ただしそれは〈注意をひとつの対象に集中する〉というのではない。心を〈空っぽ〉の状態にして対象に向き合うこと、思考の過程を一時的に静止して、記憶、経験、知識、信念、理想など〈心を条件づけるもの〉から自由になること、すなわち心が新しく創造的になることである。真の協同が生まれるのは、知識や信念や理想などの障碍から解放されて、心が静寂になるときに限られる¹⁶⁾。

現代の若い母親には（いや、誰にとっても）、心を〈空っぽ〉にすることは非常に難しいのではないだろうか。不可能だとさえ言えよう。従って心が空っぽであることの重要性に気づいているだけでよい。自分の心の中を観察してみればすぐわかることだが、私たちの心には、絶えずさまざまなく考えや〈思い〉が浮かんでいる。ふとしたことをきっかけにして昨日の出来事の記憶やこれからの予定、あるいはほんやりとした夢想など、いろいろなイメージや観念が浮かび、それが次から次へと展開しつつ続いていく。心はそれらの連なりに占領され奪い取られ、意識は目の前の現実から遠のいてしまうのだ。それらのイメージや観念は、内心の〈おしゃべり〉でもある。私たちは無意識に、心の中で自分に何かしゃべり続けているのである。それらの〈イメージ〉や〈観念〉や〈おしゃべり〉は心の中で絶え間なく生起しているのだが、私たちがその事実気づくことは多くない。

豊かな消費文化に囲まれた環境に生まれ育ち、絶えずテレビや騒音などの外からの刺激にさらされていると、〈ゆっくりした時間の流れのなかで、静かな時を過ごす〉というような機会がほとんどないのが実情だ。むしろ外界からの刺激に対して機械的・惰性的に反応するだけで、あわただしい時間が過ぎてしまう。自分の心や体が刺激に対してどう反応しているのか、心の中にどのようなイメージや観念が浮かんできているのかなどに、気をつけるだけの余裕が

ない。結局、外界からの刺激や心に浮かぶイメージなどに翻弄されてしまう。きらびやかな刺激に溢れた生活に慣れてしまうと、外界からの刺激がなければかえって落ち着きを失い、進んで刺激を求めようとするだろう。子どもがおもちゃに夢中になるように、映画や音楽やスポーツに我を忘れる。そしてこれらの没頭していたものが終わると、ひととき我に返るけれども、すぐに次の刺激を求める。クリシュナムルティによれば、観念も理想も宗教も私たちが夢中にさせるおもちゃのようなものである¹⁷⁾。最近ではケータイ・メールの普及により、私たちの心はいつも待機の状態におかれている。これでは〈目の前のこと〉に気持ちを十分に向けることができず、心は宙に浮いたような状態になってしまうだろう。

子どもを育てるときには、そのような多様な情報メディアによる刺激から少し距離をとり、子どもとゆっくり向き合い、豊かな相互交渉をもつ必要があるように思われる。そのためには自分の忙しい日常の流れ、外界の刺激に対する自分の反応や動き、あるいは心に次々と浮かんでくるイメージや観念のあり方に注意を払わなければならないのではないのか。まず自分の現在のあり方を確認してみるのだ。自己を認識することではじめて心は静まり、心に空隙が生まれるだろう。一方的な〈話しかけ〉から〈話し合い〉〈コミュニケーション〉へと切り替えるゆとりが生まれるだろう。パウアーは「母親は、自分の赤ん坊とコミュニケーションすることを学習しなければならない。それは丁度、赤ん坊が自分の母親とコミュニケーションすることを学習しなければならないのと同じである¹⁸⁾」と述べて母親の学習の必要性を強調しているが、それは同時に、自分の心や思考のメカニズムに関心をもつことの重要性を意味しているように思われる。

わが国の文化は、〈以心伝心〉や〈腹芸〉など、言語を用いないコミュニケーションを大事にしてきた伝統がある。わざわざ言葉にして言うのは水臭い。ちょっとした表情や動作から相手の心の中を察することこそ〈思いやり〉だ、と評価された。確かにこのような関係は、集団の和を重んじる文化にふさわしい。言葉に頼らなくても気持ちが伝わるような強い絆は、私たちの身体や共通の体験、さらに共有するその場の状況に根づいているだけに、私たちに安心と確かさを与えてくれるだろう。だが、以心伝心によるコミュニケーションは諸刃の剣である。やはり言葉で表現しなければ、細かなことは分かり合えないし、互いの気持ちの差異や意見の相違点などがあいまいになってしまう。場の雰囲気だけで物事が決められると、どうしても立場の強い者の主張が通りがちだ。グローバル化の進む現代では、言葉を用いてきちんと自己主張し、相手の主張にも耳を傾ける必要性が増している。つまり、コミュニケーションすることを学習する必要があるのは、決して赤ちゃんや母親だけでなく、現代の文化的な課題だと言えるだろう。言葉によるコミュニケーションの広がりや、対人関係のあり方、ひいては自己の存在のあり方をも変えていくと思われる。

ただしこの問題は、観点を換えれば、現代の非言語的なコミュニケーションの困難さを逆に浮き彫りにする。それは鷺田清一が〈身体のもつ社会性の消失〉あるいは〈他の身体との共振や交感の渇き〉として論じている身体状況、つまり私たちの身体が他者との交流を失い、〈自分だけのプライベートなもち物〉として扱われるような状況と深く関連するように思われ

る¹⁹⁾。他の身体との共振や交感は、母親と乳幼児との身体的な相互交渉や、乳幼児や小学生の運動遊びなどを通じて培われるはずであるが、高度情報社会の生活においては、身体のそのような活動が著しく損なわれてしまっているのだ。

3. ひとりでいる体験

母親がいるところで〈ひとりでいる〉という体験

母親が〈コミュニケーションすることを学習する〉ということは、〈母親が四六時中ずっと子どもの相手をする〉という意味ではない。時間的な長さのことではなく、心の姿勢、つまり〈子どもの相手をするときには、できるだけ心を空っぽにして、子どもの心と真正面から向き合う〉ということである。だから母親は母親の用事をして、子どもはひとりで遊びをみつけるような時間も、欠かすことはできない。欠かすことができないどころか、待つことや我慢することと並んで、乳幼児期に子どもが〈ひとりでいること〉は、きわめての重要なことなのである。

ウィニコットによれば、母親が近くにおいて見守ってくれるところで、子どもがひとりでいる体験、ひとりで遊んだり好きなことをしたりして時間を過ごす体験は、子どもがやがて成長したときに、〈ひとりでいられる能力〉につながる。すなわち成長したときには、実際に目の前には自分を見守る人がいない状況においても、心のなかに自分を見守ってくれる人を取り込むことができているので、そのつながりを支えにできるからである。乳幼児はやはり実際に母親がいっしょにいてくれないと不安になるが、母親が傍にいるところで〈ひとりで過ごす〉ことで、次第に母親不在のときでも、完全に自分ひとりでいられるようになる。〈母親に対する信頼感〉〈母親から庇護されているという気持ち〉が育まれるからである。アドラーも、母親は「子どもを見守ることにおいて、また子どもをひとりにしておくことにおいて、上手でなければならぬ²⁰⁾」と述べている。

自分独自の生活の発見

なぜ〈ひとりでいられる能力〉が大切なのだろうか。ウィニコットの理論では、母親がいるところでひとりでいるとき、「はじめて幼児は大人のくつろぐといわれるものに相当する状態に達することができる²¹⁾」からである。私たちはくつろいでいるとき、外界からの刺激にあまり反応することもなく、またそれほど活動的な状態にもならず、自分の感情や気持ちを確認することができる。自分が本当に望んでいることに気づくことができる。「幼児が自分独自の生活を発見できるのは（いわば誰かと一緒にいて）一人であるときのみなのである²²⁾」。

私たちは〈自分の感情や気持ちは、自分が一番よく知っている〉〈本当に自分が欲しいものなど分かっている〉と思いがちだが、果たしてそうだろうか。もしかして私たちは〈他の人が欲しがらるもの〉を欲しがっているだけなのではないだろうか。自分の気持ちや感情にしても、あまりはっきりと確認することなく、〈他の人たちの感情や気持ちと同じ〉と思っているのではないか。〈生きる意味〉にしても〈幸福とは何か〉にしても、私たちは自分独自の感性や判断を用いて、きちんと吟味しているだろうか。

〈自分が本当に欲しいものを欲しがる〉のではなく、日本では最近まで他の人たちの欲求を生きる社会だった、というのが上田紀行の指摘である。彼によれば、戦後の右肩上がりの経済成長が終わりを迎える1990年代前半までは、私たち日本人は〈他の人が欲しがるものを自分も欲しがっていれば安心だ〉という心性を生きてきた。経済成長の時代には、テレビや車などのモノばかりでなく、職業の選択にしても教育（学歴）にしても、他の人みんなが欲しがるものを欲しがっていれば、自分の生活は豊かになり、社会的地位も上昇することができた。しかし経済成長という神話が崩壊した今日では、みんなと同じ欲求を追いかけ、みんなが目指す人生を歩むようなこれまでの欲求システムは行き詰まり、その結果〈生きる意味〉が見えなくなってしまった、というのである²³⁾。

〈自分が本当に何を欲しているのか〉〈自分が何をやりたいのか〉が分からなければ、自分の独自性を感じることはできない。〈自分がここにいるという実感〉〈自分の存在感〉も得られない。それは要するに〈他の人が私と入れ替わってもかまわない〉ということであり、〈私は交換可能な存在だ〉ということの意味する。〈マクドナルド化社会〉と言われるように、現代は私たちの多くの行動が徹底してマニュアル化されている。マニュアル化が進行すればするほど、私たちは〈自分は交換可能だ〉という意識を強くもつようになっている。それは自分の〈かけがえのなさ〉の喪失であり、〈自分の代わりはいくらでもいる〉という空しさにつながっているのだ。

自分の〈かけがえのなさ〉はどこにあるのか。自分の本当の感覚や感情、自分の本当の欲求、自分が本当にやりたいこと。こうした独自の自己はどうやったら見つかるのだろうか。それには私たちがひとりになって自分のあるがままと向き合い自己認識すること、自分の体験に深く入っていき、自分自身の心の声を聴き、自分と対話することが必要であろう。反対に、絶えず外界の刺激に反応すること、自分を周りの人に合わせることばかり気にしていると、自分を見失ってしまうにちがいない。先のウニコットの理論に言及しながら、諸富祥彦は「充実した、豊かな人生を生きるためには、“ひとり”の時間を確保することが大切です。しかし、ただ“ひとり”の時間を確保すればいい、というわけではもちろんありません。(中略) 充実した“ひとり”の時間を過ごすために最も必要な力は、自分の心の声に触れていく力です。自分の心の声を聴く力が育っていてこそ、“ひとり”の時間が満ち足りたものとなるのです²⁴⁾」と述べている。ひとりになって自分を見つめ、自分の声を聴き、自分を深く掘り下げ、自分と対話することで〈個性=本当の自分〉に目覚めていく。こうした〈ひとりでいられる能力〉の確立は、「幼児または小さな子どものとき、母親と一緒にいて一人であったという体験²⁵⁾」が基盤になっているのだ。

4. アドラー心理学による育児

勇気づけて育てるアドラー心理学

「植物が太陽と水を必要としているように、子どもは勇気づけを必要としている²⁶⁾」という言葉に表されているが、アドラー心理学では、子どもの成長には周りの人からの〈勇気づけ〉

が何よりも必要だ、と考えている。なぜなら〈成長する〉ということは〈変わる〉ということであり、変わるためには勇気が欠かせないからである。勇気づけのエッセンスは、〈子どもに自信を持たせるため〉というより、子どもに〈そのままがいいのだよ〉ということ伝えることにある²⁷⁾。失敗して落ち込んでいる子ども、どうすればよいのか分からず戸惑っている子どもに、〈そんなことでどうするのだ〉〈ダメじゃないか〉と叱咤するのではなく、〈そのままがいいのだよ〉と子どもの現状を受容する気持ちを伝えることである。たとえ失敗したとしても、人間は今現在もっている力を足場にして前に進むことしかできないし、失敗から学ぶことは少なくないのだから、子どもが失敗したときにこそ勇気づけが必要なのだ。失敗するたびに叱りつけていたのでは、やる気をなくしてしまうだろう。勇気を与えられ、勇気を発達させた子どもは、やがて必要な場合には自分で自分を勇気づけることができるようになるに違いない。

子どもが成長したときの〈ひとりでいられる能力〉、自分の気持ちや感情や欲求に気づく力は、自分で自分を勇気づけ、〈今の自分でいいのだ〉と自己を肯定し受容することとつながっている。今の自分を否定するのではなく、たとえ不満があるにしても今の自分を足場(出発点)にして、そこからあらためて前向きに考えることができる。反対に〈あなたはダメね〉と絶えず否定され続けて育った子どもは、〈成長しよう〉〈変わろう〉とする勇気を失ってしまうに違いない。ひとりであることができず、いつも他人の目を気にして、誰かに依存し支えてもらおうとする、自立できない人間になってしまう。

アドラー心理学による新しい育児法

アドラーの死後、アドラー心理学の継承と発展にもっとも貢献したのはルドルフ・ドライカースである。そのドライカースがアドラー心理学の立場から育児について述べている。まず、子どもの教育の開始は、誕生のその日から可能だと考えられている。そしてその教育的課題は、子どもが規則正しい授乳時間に慣れること、家庭や社会生活の自然な秩序に従うこと、空腹感やおしめが濡れている感じの不快さに耐えること、自分が好まないことに我慢することなどである。反対に、子どもの世話に時間を使いすぎたり、子どもを十分に眠らせなかったり、子どもが泣く時は何時でも子どもを揺すったり、抱いて歩いたりすることは、子どもを甘やかすことであり好ましくないこととされている²⁸⁾。

このような育児の考え方は、〈子どもを甘やかしたり、抑圧したりしないで子どもを育てる方法〉つまり〈民主的な教育方法〉の一環である。民主主義が急速に成長した現代では、〈みんな平等だ〉という民主主義の意識が、単に法律のうえだけでなく、私たち自身の対人関係の意識にも影響を及ぼしている。したがって従来の〈支配と服従の関係〉では対人関係がうまくいかず、〈黙って言うことを聞きなさい〉〈私の言うとおりにしなさい〉式の強制的・命令的な子育て方法は、すぐに子どもの反発をかうようになるだろう。子どもも意思決定への参加を望んでいるのだ。「平等とは、ひとりひとりが自分の力で物事を決定することを意味²⁹⁾」している。それゆえ平等な社会では、女性に対する男性の支配力、妻に対する夫の支配力、子どもに対する親の支配力が弱くなり、力や圧力や罰の脅しなどを使う独裁的な家庭や学校では、さま

ざまな問題が生じてくる。〈支配と服従の上下関係から平等な民主的関係へ〉という社会的風潮の変化を、子どもたちが感じ取っているからである。

しかし強制的で抑圧的な子育て方法に替わる〈新しい育児法〉とは、どのようなものなのか。〈民主的な新しい育児法〉と言われても、その中身はよく分からないのではないか。〈母親は、自分の赤ん坊とコミュニケーションすることを学習しなければならない〉というパウアーの言葉を先に紹介したが、同じように〈私たちは、子育ての新しい方法を学ばなければならない〉と言う必要があるようだ。新しい民主的な方法を学ばないかぎり、結局は自分の親が用いていた権威主義的な古い方法、自分が子どもだったときには嫌だと思っていた方法を採用してしまうだろう。それは叱ったり、脅したり、なだめすかしたり、罰を与えたり、恥をかかせたり、けなしたりする伝統的な方法だ。他の方法を知らないからである。すると子育てを始めたころは〈素直で優しい子どもに育てたい〉〈幸福になってほしい〉と思っていたはずであるのに、やがてわがままで反抗的な子どもの態度に手を焼くようになるだろう。あるいは抑圧的なやり方をやめて、それとは正反対の方法、つまり〈自由放任の育児方法〉を採用して、それが民主的な方法だと考えるかもしれない。しかし自由放任の方法をとると、子どもはやがて勝手気ままに振る舞い、何でも好きなことをしてもよいのだと思うようになるだろう。家庭や学校の秩序は失われ、目に余る行動があちこちで見かけられるようになるに違いない。「罰や抑圧的な方法に頼らないで、秩序を維持し、知識を授けることができる³⁰⁾」ためには、何が必要なのだろうか。〈自由には義務や責任がつきまとい、他人の自由も尊重しなければならないのだ〉ということをお教えることはできるのだろうか。

相互尊敬の関係

民主的な育児方法の基本原理は平等であり、平等の価値のうえに、大人と子どもの関係を基礎づけることである。大人から見ると、子どもは体も小さく、身体的な能力や責任をとる能力も限られている。子どもを平等な存在と見なすことはばかげたことのように思われるかもしれない。平等と尊敬が与えられるにすれば、あまりにも未熟で粗野だという印象もぬぐえない。確かに知識や経験や能力を比べれば、子どもは大人と対等とは言えないだろう。しかし能力や知識の差にかかわらず、すべての個人は存在する権利をもっている。誰もが同じ人間としての尊厳と誇りをもっている。その意味で子どもと大人は平等なのであり、相互に尊敬し合う関係を築くことができる。

子どもを劣ったもの、何かとるに足りないもの、無知で不器用なものとして扱う育児法は、子どもを平等だとは認識しておらず、子どもを意思決定の過程に参加させることもない。とくに子どもがまだ乳幼児の段階では、大人と子どもの知識や能力の差が大きいので、大人がなんでも決めてしまいがちだ。子どもに〈あなたが決めなさい〉と言うと、かえって子ども自身が戸惑うケースもあるだろう。だが、すべてのことを親が決定し、それを子どもに押しつけるやり方を続けるならば、子どもが義務や責任について学ぶ機会が奪われる。思考力や判断力を養う機会も少なくなってしまう。抑圧的でもなく自由放任でもない方法、すなわち、すべてを親

が決めるのではなくすべてを子どもに任せてしまうのでもない方法が求められているわけだが、どうすればよいのだろうか。

ここはやはり〈母親と赤ちゃんのコミュニケーション〉について述べたように、親と子どもがその都度コミュニケーションを図りながら、その時点の可能な範囲でお互いの気持ちや意見を出し合い、分かり合う努力が必要であろう。親が決定し、それを子どもにやらせるほうが、話は簡単だ。しかし子どもの能力や理解力の成長に合わせて、徐々に子どもにも意思決定に参加させ責任を分かち合うようにすることが、協同的なよい関係を築くうえでぜひとも必要である。これは親の立場からすればいちいち子どもの意思を確認することなので根気の要る作業だが、相互に尊敬する気持ちがあれば、コミュニケーションによってお互いの理解が進み、お互いの納得のいく決定が得られるだろう。

子どもに人間としての尊厳と誇りを認めることは、子どもを人間として尊敬し、その子どもの考えたことに価値を認め、子どもの貢献を受け入れることである。もちろんある特別な状況のもとでは、その子どもの貢献は価値がないものとして断ることもできる。ただしそれは、その子どもを人間として拒絶するわけではない。相互尊敬という意味は、お互いが何か提供するものを持っていること、またそれを提供する権利を持っていることを認めることである。

乳児期の成長と発達

ここで乳児期の成長と発達について、重要なものをいくつかごく簡単に述べておこう。4ヶ月ごろから、視覚や聴覚の発達に支えられて、〈目と手の協応〉の動作が見られるようになる。モノに手をのばしたり、手がそれに触れるとつかんだりする。モノに手をのばしたときに、たまたま視野に自分の手が入ると、手に注意が向けられることもある。両方の手を交互に見たり、片方の手でもうひとつの手をつかんだり、片方の手をじっと見ながら開閉したりして、自分の体が興味の対象にもなっている。視覚対象としての自分の手と、モノに触れたりつかんだりする能動的な手との統合がなされているのであろう。

生後6ヶ月くらいになると、支えられなくても座っていられるようになる。お座りができると視界が広がり、両手も自由に動かすことができる。モノへの働きかけも活発で、つかんだり、振ってみたり、口の中に入れてみたりして、いろいろなかたちで働きかけているようだ。

生後5ヶ月には寝返りができるようになり、仰向き状態で足をけて前に進むことができるが、ハイハイができてあちこち這い回るようになるのは7～8ヶ月になってからである。8ヶ月くらいから人見知りや分離不安があらわれ、母親と乳児の間にいわゆる〈愛着関係〉が形成されたことがわかる。

10ヶ月ころから立つことができるようになってくる。つかまり立ちから手を離して立つ、つたい歩き、そしてヨチヨチ歩きへと進んでいく。言葉の面では喃語の発声につづき、10ヶ月から14ヶ月くらいになると、初語が発現する。

母親の役割

これらの成長・発達が正常になされるためには、母親はどのような役目を果たせばよいのだろうか。栄養や衛生状態に気をつけ、適度な運動や睡眠にも気を配り、生活のリズムを大切に子どもを成長を援助することについては、言うまでもない。アドラーは次のような、二つの母親の役割をあげている³¹⁾。ひとつは、成長していく子どもとのあいだに身体的かつ精神的な結びつきをつくること。これは子どもがまず母親において、愛と仲間意識（共同体感覚）を強く経験するということである。もうひとつは、母親のもとで生まれたその共同体感覚を、次第に他の人とかかわりをもつ好意的で信頼に満ちた責任ある態度へと変えていくこと。つまり母親に向けられた子どもの愛と依存を、次第に他の人や社会にも広げて、子どもが〈自分はお互いに助け合い協力し合う共同社会の中の一員である〉という意識を育てることである。母親の二つの役割は、結局、育児や教育の目的と一致することになる。ドライカースは「教育の全目的は、子どもに他者との生活に参加する準備をさせ、子どもが共同体の中で居場所を得てそれを保持するように援助することである。言い換えれば、育児の目的は、人生における成功と幸福を左右する共同体感覚を育成することである³²⁾」というようにまとめている。

E. H. エリクソンは乳児期（口唇期）の発達課題として〈基本的信頼〉をあげる。アドラー心理学でも、相互交渉を通じて母親と子どものあいだに身体的および精神的なきずなを形成すること、愛と信頼の関係を築くことを第一の課題としている。だがそこに留まらないところに、アドラー心理学の特徴があるだろう。母親の第二の役割は、そのきずなを母親と子どもの二人の関係の中に閉じてしまわないで、周りの人との関係に開いていくことだからである。つまり最初から共同社会とのかかわり、他者との共感、共有、協力などを視野に入れているのだ。〈共同体感覚の育成〉こそ、アドラー心理学にもとづく育児や教育のアルファでありオメガである。

信頼関係を築く母親の一貫した態度

愛と信頼の関係を築くためには、子どもの世話をするときの母親の一貫した対応が欠かせない。子どもの欲求に対して、もし母親が気分しだいで子どもの欲求に答えたり答えなかつたりすると、どうなるだろうか。子どもの同じ欲求に対して、母親が気まぐれで、あるときは機嫌よく答え、あるときは無視し、あるときは怒って叱りつけたりして、そのつど異なる態度をとるようなら、子どもにはその対応の違いを生み出す理由が分からず、混乱してしまうにちがいない。〈こうしたら、こうなるだろう〉という予測や見当がつかないからである。

E. H. エリクソンによれば、基本的信頼が根づくには、子どもの個々の欲求に対する行き届いた世話だけでは十分でない。子どもの中に信頼感が生まれるのは、母親の世話が〈地域や文化の生活様式として信頼されている枠組み〉にもとづいているからである。言い換えれば、母親の世話やしつけは、その子の属する社会の独自の文化様式と密接に関連していなければならない。育児の方法が経済や文化の統合体系の中に深く組み込まれているとき、それは一貫性を保つことができるのだ。そのときはじめて〈自分は信ずるに足る人間である〉という感覚が子どもに生まれ、〈自分は自分だ〉という同一性の基礎が形づくられる³³⁾。

エリクソンの研究したアメリカ・インディアンのスー族は、集団でキャンプ生活をしながら野牛を追う部族であった。キャンプ生活、野牛狩り、踊りはすべて厳格な規律に従って行われ、彼らは残忍・剛勇さで知られていた。絶えず移動する遊牧民なので、持ち運ぶことのできる最小限の家財道具があればよく、モノを所有する、貯えるということはあまり意味がない。すぐ人にモノをやってしまう寛大さ、獲物を均等に分かち与える気前のよさは、狩猟を生業としている彼らには、社会的必要性と結びついていた。そしてこの寛大さは、彼らの育児方法の中にも定着している。授乳はまったく自由に行われ、昼でも夜でも泣くたびに乳房が与えられる。授乳期間は3年から5年にわたり、自然に離乳するまで待たれる。だが乳児に歯が生えてきて、乳房を激しくかむようになると、母親は乳児の頭をゴツンとなぐり、乳児は狂ったように怒りだす。乳児期のこの激しい怒り、噛みたい欲求の抑制が、将来の狩人としての獰猛さや不屈の精神を喚起する。

このように乳幼児期の扱いは、深く文化や生産様式や風土などに根ざしているのである。したがって育児のしかたについてある特定の項目（たとえば授乳の仕方など）だけを取りあげて、〈どうあるべきか〉を問うことよりも、育児が全体としてどのような体系になっているのかを見る必要があるわけだ。母親の世話が文化の生活様式から大きく逸脱しているような場合には、そこに首尾一貫性を期待することはできず、それゆえ子どもに信頼感を生み出していくことはできないだろう。

現代の消費文化の様式と育児方法

エリクソンの理論を参考にすると、なぜ現代の育児が〈超日本式育児〉になっているのか、よく理解できるように思われる。すなわち、子どものあらゆる欲求に即座に応えようとする今日の日本の育児方法は、現代の高度消費社会・成熟社会における文化様式に深く根ざしているであろう。私たちの生きる社会は、〈他の人に迷惑をかけない限り、自分の好きにしてもよい〉とする、私的欲望を肯定する社会になっている。人生に対する大人の態度も、消費主義的な快樂追求を基本にしている。現在では当然のように思われるこうした価値観や目標が、私たちの日常の生活様式に浸透したのは、せいぜい高度経済成長期以降のことである。脱産業社会と言われ、高度経済成長が終焉するなかで、生産主義的な態度や価値観は、急速に色あせたものになっていった。

私たちの私的欲望を肯定する考え方、個々人の多様なかたちの幸福追求行動の広まりは、家族を消費生活の単位に変化させ、今では家族の個人化を推し進めている。食事バラバラ、テレビは個室で見るという子どもが少なくない。個々人のそのつどの欲望を肯定しようとするれば、家族の結びつきは弱くなり、次第に個人にバラけることになるのである。すると乳幼児の世話をする母親は、自分の育児活動に対して〈赤ちゃんの私的な欲望の世話〉という意味しか与えることができず、赤ちゃんの世話を、家族の協同活動や社会全体の活動の広がりの中に位置づけて考えることが難しい。熱心に世話をすればするほど、赤ちゃんの私的欲望あるいは生理的欲求の充足をめぐる活動に囲い込まれて、母親は家族や社会からの孤立感を強めるのだ。

だからといって、現代の育児の場面で、子どもの私的な欲望を否定し、我慢を教えることは容易ではない。我慢や禁欲は、高度経済成長期以前の家庭生活では、〈厳格な親がきちんとつけた〉というよりも、その多くは冬の寒さや貧しさや不便な生活など、厳しい自然や生活環境のもとでの生活そのものを通して身につけられたものである。今日のように社会経済構造が変化し、便利で快適な消費生活が営まれるなかで、私的な欲望を抑えることができるためには、我慢や禁欲の必要性が本人にも納得され自覚されているのでなければならない。つまり誰かから強制されるものではなく、内発的な動機づけに基づくのでなければならない。

親子間や家族内で共同生活の絆が保持され、他方でお互いに我慢の強制が起こらないようにするためには、これまで以上に丁寧にコミュニケーションをとり、相互理解の質を高める努力が必要である。アドラー心理学は、教育の目的に共同体感覚の育成を掲げるけれども、共同体感覚は、個人の権利よりも共同体の秩序を優先する〈共同体主義〉を意味するわけではない。逆に、個人が自由と自己決定の主体でありつつ、他者を尊敬し、個人の集まりである共同体に参加し協力する態度である。個人を尊重しつつ、共同生活を営む。私たちは、そのために欠かせない新しい人間観や価値観、コミュニケーションを含め対人関係の持ち方・方法などを学ぶ必要に迫られている。

所属欲求

ドライカースは「人間は社会的存在であり、主な願望は所属することである。これは、大人にも子どもにも同じように真実である³⁴⁾」と述べて、人間の根本欲求が〈居場所を確保する〉〈所属する〉ということであることを強調している。なぜなら人間は無力な状態で生まれてくるからであり、また、子どもが成熟するためには長い時間を必要とするからである。「社会生活の始まりは、個人の弱さの中にその起源がある³⁵⁾」のである。大人でさえ、もし自分がこの世界のどこにも居場所がないと感じるなら、生きていくことは難しいだろう。

無力な乳児が生存できるのは、他者（親）の世話を受けるからである。鷲田清一によれば、いかなる条件や留保もなしに、つまり〈自分がただここにいる〉という理由だけで他者に世話をしてもらった乳幼児期の経験こそ、将来たとえ私たちが最後のぎりぎりの苦境に陥るようなことがあろうとも、〈世界や他者に対する信頼〉や〈自己の人生への肯定感情〉を失わないようにしてくれる経験である³⁶⁾。ただし乳児は、〈いつまでも無条件で存在の世話をしてもらえばよい〉というわけではない。アドラーは「生後数ヶ月の乳児ですらすらに、その子が人生に対してどのような態度をとるかが確認できる³⁷⁾」と述べているが、〈認めてもらいたい〉という最も根源的な欲求を満たそうとして、子どもは極端に言えば、二つの行動の可能性をもつことになる³⁸⁾。ひとつは、努力して自分の弱さや無力さを克服する方向。事をやり遂げる力を示すことで承認を求めようとするのである。もうひとつは、自分の弱さや無力さを見せつけ、他者の世話や援助を要求する方向。誰かにかまってもらったりちやほやしてもらったりすることで、自分の居場所や所属を確認しようとする。子どもには、よくこうした心の二面性を見ることができよう。ある子どもたちは、ひたすら頑張ってやり遂げようと努力する方向で発達する

が、他の子どもたちは、泣き喚いたり甘えたりして存在を認めてもらい、周りの大人の世話を要求する³⁹⁾。

いずれにしても、子どもは試行錯誤しつつ、人生に対して主体的に自分なりの態度を決めているのだ。あらゆる困難を他者に除けてもらったり、何をしても許されたりして甘やかされて育つ子どもは、他者への依存性を強める一方で、他者の注目を常に自分に向けさせるために、どんな手段でも用いるかもしれない。また、自分の環境に適応しようと絶えず前進する子どもは、自分自身の創造的な力や独創的な方法を用いて自らの弱さを克服する努力を重ねるだろう。他者に必要とされるような能力を発展させつつ、家族共同体の中で居場所を確保し、さらに家族との結びつきを強化して所属をより確かなものにしようとする態度である。〈子どもの教育可能性〉は、この〈自らの弱さや無力さを克服し、より有用で価値あるものになることで集団への所属感を高めようとする努力〉のなかに基礎づけられている。従って子どもの身体の弱さは、〈社会志向〉と〈教育〉とを互いに結びつけているのである⁴⁰⁾。

教育の目標

アドラー心理学では〈居場所を見つきたい〉〈一員として認められたい〉〈所属感を得たい〉〈大事にされたい〉といった〈社会志向の感覚〉あるいは〈共同体感覚〉と、〈弱さを克服したい〉〈より価値あるもの・優れたものになりたい〉〈向上したい・より有能になりたい〉という〈優越性の追求〉あるいは〈克服の努力〉とが、人間の生の二つの基本的な力学だとされている。この二つの基本的力学は、同じように生得的だと見なされているが、〈共同体感覚〉はあくまでも生得的素質なのであり、〈共同体感覚は意識的に発達させられなければならない潜在的可能性である〉というところに、両者の重要な違いがある⁴¹⁾。

それというのも、〈共同体に所属する〉〈共同社会に参加し、貢献する〉と言うときの〈共同体〉は、個人の所属する家族や地域や国、あるいは現実の社会に限定されるわけではなく、〈未来の理想的な社会〉や〈宇宙全体〉という抽象的な概念を含んでおり、〈永遠の相の下での共同体〉〈人間が完成という目標に達しえたとした場合に考えることができるような共同体〉までも射程に入っているからである⁴²⁾。

また、〈もっと優れた人になろう〉〈有能さを認めてもらおう〉とする〈優越性の追求〉の努力は、もし〈共同体感覚〉が未発達のままであるならば、〈他者に負けたくない〉〈一番になろう〉〈競争に勝とう〉といった利己的な目標に終始することになるだろう。そうならないためには、〈自分は人類共同体や宇宙に所属しているのだ〉という感覚が〈優越性の追求〉を正しく導いて、その努力を全人類の発展に寄与し貢献する方向に一致させることが肝要である。言い換えれば、〈他の人と結びつき、他の人と協力し、人類の福利に貢献したい〉という〈共同体感覚〉が、個人が〈より優れたもの・有用なもの〉になろうとする努力を方向づけること、つまり〈共同体感覚〉と〈優越性の追求〉の二つの基本的力学のどちらも達成することが、人間の健全な発達にとって重要な意味をもっている。従って教育が目標にするのは、子どもの弱さの克服や優越の努力が〈人類社会との同一化〉〈共同生活の感情〉〈いのちへの所属〉とい

た豊かな共同体感覚に基づいて遂行されるように、共同体感覚を育成することである⁴³⁾。

注

- 1) R. M. レスタック『乳児の脳とこころ』、河内十郎・高木薫訳、新曜社、1989年、249-260頁参照。
- 2) 同書、252頁。
- 3) T. G. R. バウアー『ヒューマン・ディベロプメント』、鯨岡峻訳、ミネルヴァ書房、1982年、71-77頁参照。
- 4) 同書、66頁。
- 5) T. G. R. バウアー『乳児期』、岡本夏木他訳、ミネルヴァ書房、1989年、35頁。
- 6) 同書、37頁参照。
- 7) 同書、37-39頁およびバウアー、上掲書、386-388頁参照。
- 8) 正高信男『0歳児がことばを獲得するとき』、中央公論新社、1993年参照。
- 9) バウアー『乳児期』、33頁。
- 10) 品田知美『子育て法革命』、中央公論新社、2004年、132-146頁参照。
- 11) A. Hooper and J. Holford, *Adler for beginners*, Writers and Readers Publishing, 1998, p. 93. (鈴木義也訳『初めてのアドラー心理学』、一光社、2005年、93頁)
- 12) *Ibid.*, p. 93. (邦訳、93頁)
- 13) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, H. L. Ansbacher and R. R. Ansbacher (eds.), Harper & Row, 1964, p. 372.
- 14) A. Adler, *What life could mean to you*, Hazelden, 1998, p. 98. (高尾利数訳『人生の意味の心理学』、春秋社、1997年、141頁)
- 15) 〈話しかけ〉と〈話し合い〉の違いについては、R. Dreikurs and V. Soltz, *Children: The Challenge*, Plume, 1990, pp. 294-300. (早川麻百合訳『勇気づけて躰ける』、一光社、1999年、444-453頁)を参照。幼児期のうちから思いやりのある親子関係を確立することが、その後の子どもとのコミュニケーションを可能にする。子どもの考えや行動を一概に非難したり否定したりするのではなく、問題を解決するために子どもとともに考え、解決策を探るプロセスが、協同的な親子関係の礎である。
- 16) 〈協同〉についての考察は、J. Krishnamurti, *The First and Last Freedom*, HarperCollins, 1975, pp. 122-124. (根木宏・山口圭三郎訳『自我の終焉』、篠崎書林、2000年、174-177頁)を参照した。アドラー心理学とクリシュナムルティを結びつけて考えることに関しては意外に思われるかもしれない。だが、アドラーの〈共同体感覚〉の概念や認知論、目的論、全体論の立場を深めていくと、クリシュナムルティによって明らかにされた人間の思考や精神のあり方に通じていくのではないだろうか。クリシュナムルティによる〈受動的な自己凝視〉は、共同体感覚を自ら育むうえで欠かせない方法を示しているように思われる。
- 17) J. Krishnamurti, *Freedom, Love, and Action*, Shambhala, 1994, p. 210
- 18) T. G. R. バウアー『乳児期』、75頁。
- 19) 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』、PHP 研究所、1998年参照。
- 20) A. Adler, *ibid.*, p. 98. (邦訳、141頁)
- 21) D. W. ウィニコット『情緒発達の精神分析理論』、牛島定信訳、岩崎学術出版、2005年、28頁。
- 22) 同書、28頁。
- 23) 上田紀行『生きる意味』、岩波書店、2005年、13-23頁。
- 24) 諸富祥彦『孤独であるためのレッスン』、日本放送出版教会、2003年、214-215頁。
- 25) D. W. ウィニコット、上掲書、23頁。
- 26) R. Dreikurs and P. Cassel, *Discipline Without Tears*, Plume, 1991, p. 49. (松田莊吉訳『やる気を引き出す教師の技量』、一光社、1991年、83頁)
- 27) *Ibid.*, p. 49. (邦訳、83頁)
- 28) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, Routledge. 1999, pp. 18-22, pp. 95-111. (宮野栄

- 訳『アドラー心理学の基礎』、一光社、1998年、37-41頁、123-139頁)
- 29) R. Dreikurs and V. Solz, *Children : The Challenge*, p. 7. (邦訳、17頁)
 - 30) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, p. 109. (邦訳、137頁)
 - 31) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, pp. 372-374.
 - 32) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, p. 102. (邦訳、131頁)
 - 33) エリクソン『幼児期と社会 I』、仁科弥生訳、みすず書房、1977年、170頁。
 - 34) R. Dreikurs and P. Cassel, *Discipline Without Tears*, p. 8. (邦訳、8頁)
 - 35) A. Adler, *The Science of Living*, Doubleday, 1969, p. 18. (岸見一郎訳『個人心理学講義』、一光社、1997年、46頁)
 - 36) 鷺田清一、上掲書、71頁。
 - 37) A. Adler, *Understanding Human Nature*, Hazelden, 1998, p. 34. (高尾利数訳『人間知の心理学』、春秋社、1997年、50頁)
 - 38) *Ibid.*, p. 28. (邦訳、41頁)
 - 39) *Ibid.*, p. 28. (邦訳、41頁)
 - 40) A. Adler, *The Education of Children*, Gateway, 1978, pp. 118-119. (岸見一郎訳『子どもの教育』、一光社、1998年、112-113頁)
 - 41) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, p. 134.
 - 42) A. Adler, *Superiority and Social Interest*, W. W. Norton, 1979, p. 34.
 - 43) G. J. Manaster and R. J. Corsini, *Individual psychology: Theory and Practice*, F. E. Peacock, 1982, p. 13. (高尾利数、前田憲一訳、『現代アドラー心理学』上、春秋社、1999年、41頁)

(原稿受理 2006年4月5日)